

# 善知鳥

鳥頭とも書く

世阿弥作

前

ワキ 旅僧

シテ 老翁

後

ツレ(母) 獵師の妻

子方(謡なし) 其子千代童

ワキ 前に同じ

シテ 獵師の霊

地は 前は越中 後は陸奥

季は 四月

ワキ詞

「是は諸国一見の僧にて候。我いまだ陸奥卒土の浜を見ず候ふ程に。此度思ひ立ち卒土の浜一見と志して候。又よきついでにて候ふ程に。立山禪定申さばやと存じ候。急ぎ候ふ程に。是は早立山に着きて候。心静かに一見せばやと思ひ候。さても我此立山に来て見れば。まのあたりなる地獄の有様。見ても恐れぬ人の心は。鬼神より猶恐ろしや。山路に分つ街の数。多くは悪趣の嶮路ぞと。涙もさ

らにとゞめ得ぬ。慙愧の心時過ぎて。山下にこそは下りけれ。く。

シテ詞

「なふくあれなる御僧に申すべき事の候。

ワキ

「何事にて候ふぞ。

シテ

「陸奥へ御下り候は言伝申し候ふべし。卒土の浜にては獵師にて候ふ者の。去年の秋身まかりて候。其妻や子の宿を御尋ね候ひて。それに候ふ簞笠手向けてくれよと仰せ候へ。

ワキ「是は思ひもよらぬ事を承り候ふ物かな。届け申すべき事はやすき程の御事にて候ふさりながら。上の空に申してはやはか御承引候ふべき。

シテ「実にたしかなるしるしなくてはかひあるまじ。や。思ひ出でたり有りし世の。今はの時まで此尉が。木曾の麻衣の袖を解きて。

地「是をしるしにと。涙を添へて旅衣。く。立ち別れ行く其跡は。雲や煙の立山の。木の芽も萌ゆる

遙々と。客僧は奥へ下れば。亡者は泣くく見送りて。行く方知らずなりにけり。く。(中入)

ツレ母「実にや本よりも定めなき世の習ひぞと。思ひながらも夢の世の。あだに契りし恩愛の。別れの跡の忘れ形見。それさへ深き悲しびの。母が思ひを如何にせん。

ワキ詞「如何に此屋の内へ案内申し候はん。

ツレ詞「誰にて渡り候ふぞ。

ワキ「是は諸国一見の僧にて候ふが。立山禅定申し候ふ所に。其様すさまじき老人の有りしが。陸奥へ下らば言伝すべし。卒土の浜にては獵師にて候ふ者の。去年の秋身まかりて候。其妻子の宿を尋ねて。それに候ふ簀笠手向けてくれよと仰せ候ふ程に。上の空に申してはやはか御承引候ふべきと申して候へば。其時めされたる麻衣の袖を解きて賜はりて候ふ程に。是まで持ちて参りて候。若し思し召

し合はする事の候ふか。

ツレ母「是は夢かやあさましや。四手の田長のなき人の。上聞きあへぬ涙かな。

詞「さりながら余りに心もとなき御事なれば。いざや形見を簀代衣。まどほに織れる藤袴。

ワキ「頃も久しき形見ながら。

ツレ母「今取り出だし。

ワキ「よく見れば。

地「疑ひも。夏立つ今日の薄衣。く。一重なれども合はすれば。袖ありけるぞ。あらなつかしの形見や。やがて其まゝ弔ひの。御法を重ね数々の。中に亡者の望むなる。簑笠をこそ手向けゝれ。く。」

ワキ「南無幽霊出離生死頓証菩提。」

後ジテ「陸奥の卒土の浜なる呼子鳥。鳴くなる声はうとふやすかた。一見卒都婆永離三悪道。此文の如くは。たとひ拝し申したりとも。長く三悪道をば遁るべ

し。如何にいはんや此身の為め。造立供養に預からんをや。たとひ紅蓮大紅蓮なりとも。名号智火には消えぬべし。焦熱大焦熱なりとも。法水には勝たじ。さりながら此身は重き罪科の。心はいつかやすかたの。鳥獸を殺しゝ。

地「衆罪如草露恵日の日に。照らし給へ御僧。」

地「所は陸奥の。く。奥に海ある松原の。下枝に交じる汐蘆の。末引きしをる浦里の。籬が島の笹屋

形。 困ふとすれどまばらにて。 月の為めには卒土の浜。 心ありける住居かな。 く。

ツレ母「あれはとも言はゞ形や消えなんと。 親子手に手を  
取り組みて。 泣くばかりなる有様かな。

シテ「あはれや実にいにしへは。 さしも契りし妻や子も。  
今はうとふの音に泣きて。 やすかたの鳥の安から  
ずや。 何しに殺しけん。 我子のいとほしき如くに  
こそ。 鳥獣も思ふらめと。 千代童が髪をかき撫

でゝ。 あらなつかしやと言はんとすれば。

地「横障の。 雲の隔てか悲しやな。 く。 今まで見え  
し姫小松の。 はかなや何処に。 木隠笠ぞ津の国の。  
和田の笠松や箕面の。 滝津波も我袖に。 立つや卒  
都婆のそとは誰。 簑笠ぞ隔てなりけるや。 松島や。  
小島の苦屋内ゆかし。 我は卒土の浜千鳥。 音に立  
てゝ。 泣くより外の事ぞなき。

地クリ「往事渺茫としてすべて夢に似たり。 旧遊零落して

半泉に帰す。

シテサシ  
「とても渡世をいとなまば。士農工商の家にも生ま  
れず。

地  
「又は琴碁書画をたしなむ身ともならず。

シテ  
「唯明けても暮れても殺生をいとなみ。

地  
「遅々たる春の日も所作足らねば時を失ひ。秋の夜  
長し夜長けれども。漁火白うして眠る事なし。

シテ  
「九夏の天も暑を忘れ。

地  
「玄冬の朝も寒からず。

クセ  
「鹿を逐ふ獵師は。山を見ずといふ事あり。身の苦  
しさも悲しさも。忘れ草の追鳥。高縄をさし引  
く汐の。末の松山風荒れて。袖に波こす沖の石。  
又は干潟とて。海ごしなりし里までも。千賀の塩  
竈身を焦がす。報いをも忘れける。事業をなし、  
悔しさよ。そもく善知鳥。やすかたのとりぐ  
に。品かはりたる殺生の。

シテ「中に無慙やな此鳥の。

地「愚かなるかな筑波嶺の。木々の梢にも羽を敷き。

波の浮巢をもかけよかし。平砂に子を生みて落雁の。はかなや親は隠すとすれど。うとふと呼ばれて。子はやすかたと答へけり。さてぞ取られやすかた。

シテ「うとふ。

地「親は空にて血の涙を。降らせば濡れどと菅簞や。

笠を傾けこゝかしこの。便を求めて隠笠。隠簞にもあらざれば。猶降りかゝる血の涙に。目も紅に染み渡るは。紅葉の橋の鵲か。

地「娑婆にては。善知鳥やすかたと見えしも。くく。

冥途にしては怪鳥となり。罪人を追つ立て鉄の。嘴を鳴らし羽をたゝき。銅の爪を磨ぎ立てゝは。眼をつかんでしゝむらを。叫ばんとすれども猛火の煙に。むせんで声をあげ得ぬは。鴛鴦を殺しゝ



科やらん。遁げんとすれど立ち得ぬは。羽抜鳥の  
報いか。

シテ「うとふは却つて鷹となり。

地「我は雉とぞなりたりける。遁れ交野の狩場の雪  
吹に。空も恐ろし地を走る。犬鷹に責められて。  
あら心うとふやすかた。安き隙なき身の苦しみを。  
助けてたべや御僧。助けてたべや御僧と。いふか  
と思へば失せにけり。